

現代日本小説大系

13

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十三卷

河出書房版

現代日本小說大系 第三十卷

昭和二十六年八月二十日
昭和二十六年八月二十五日

初版印刷
初版發行

著者
表

近松秋江

發行者
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

編集者
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會

印刷者
東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山中光夫

印刷者
東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

會員番號A一一〇一四番
電話神田(25)三二七四番

株式會社大化堂印刷製本

目次

岩野泡鳴

毒藥を飲む女……………四

放浪……………七九

斷橋……………一七

近松秋江

別れた妻に送る手紙……………二五三

黒髪……………二九四

解説(中村光夫)……………三五

岩野泡鳴

毒藥を飲む女
放浪
斷橋

毒藥を飲む女

「おい、あの婆アさんが靈感を得て來たやうだぜ。」

「れいかんツて——？」

「云つて見りやア、まア、神さまのお告げを感づく力、さ。」

「そんな阿呆らしいことツて、ない。」

「けれど、ね、さうでも云はなけりやア、お前達のやうな者にやア分らない。——どうせ、神なんて、耶蘇教で云ふやうな存在としてはあるものぢやアない。従つて、神のお告げなどもないのだから、さう云つたところで、人間がその奥ぶかいところを持つてゐる一種の不思議な力だ。」

「そんなものがあるものか？」

「ないとも限らない——ぢやア、ね、お前は原田の家族にでもここにゐることをしやべつたのか？」

「あたゐ、しやべりやせん——云うてもえいおもたけれど、自分のうちへ知れたら困るとおもつて？」

「でも、あいつは、もう、知つてゐるぞ、森のある近所と云ふだけのことは。」

「森なら、どこにでもある。」

「さうだ、ねえ」と受けて、義雄はそれ以上の心配はお鳥に語らなかつた。無論、千代子が或形式を以つて實際お鳥を呪ひ殺さうとしてゐるらしいことも、お鳥には知らしてない。たださへ神經家であるのに、その上神經を惱ましめると、面倒が殖えるばかりだと思つてゐるからだ。

が、お鳥も段々薄氣味が悪くなつたと見え、日の經つに従つて、義雄の話を忘れるどころかあり／＼と思ひ出すやうになつたかして、つひにはまた引ツ越しをしようと云ひ出した。もし知られると、今までにでも、云はないでいい人にまで目かけだとか、恩知らずだとか、呪ひ殺してやるだとか云つてゐるあいつのことだから、わざと近所隣りへいろんな面倒臭いことをしやべり立てるだらうからと云ふのである。

然し、この頃お鳥はおもいかぜを引いてここに遁入つてゐた。近所の醫者を呼んで毎日見て貰ふと、非常に神經のつよい婦人だから、並み以上の熱を持ち、それがまた並み以上に引き去らないのだと説明した。その上、牛込の病院に行けないので、一方の痛みも亦大變ぶり返して來た。

かの女は氣が氣でなくなつたと見え、獨りでもがいて、義雄にも聽えるやうに、

「何て因果な身になつたんだらう」と三疊の部屋で寢込みながら、忍び泣きに泣いた。おもての方の廣い、然し向う側の森から投げる蔭をかぶつた室——六疊——には、憲兵が三人で自炊する様になつてゐた。

義雄は同じ家にゐる憲兵等に物も云ひかはさなかつたが、毎

日、晝間からお鳥の看護に努めた。同時に、自分もひどい痔に悩んだ。

重吉からの返電は来ず、東京に残つてゐる重吉の女房に問ひ合はせると、北海道の方をまはつてゐると云ふのであつた。義雄はまだ鑑詰の事業の手初めも出来ないのが、無聊の感に堪へなかつた。

丁度、その時、我善坊の方へいいハガキが届いた。

「龍土會例会——一、時日——一、場所——一、會費——右御出席の有無○○○區○○○町○○番地○○○○方へ御一報を乞ふ年月日——幹事——」と、印刷摺りにしてある中へ、それぞれ必要な文字を入れたハガキであつた。

龍土會と云ふのは、おもに自然主義派と云はれる文學者連を中心としての會合で、大抵毎月一回晚餐の例会を開くことになつてゐる。幹事は二名づつのまはり持ちで、この月には田島秋夢と今一名渠と同じ新聞社にある人の名が出てゐた。

義雄はこの會の最も忠實な常連の一人でもあるし、友人どもの顔も暫く見ないし、印刷を終つた自著『新自然主義』がいよいよ世間に出た當座の意氣込みもあつたことだし、喜んで出席することにした。そしてお鳥が、その日になつてもこちらの痔が悪くなるにきまつてゐるから止めて呉れろと頼んだのも承知しなかつた。

中の町から檜ひのきまち町の高臺にあがると、麻布の龍土町である。そこの第一聯隊と第三聯隊との間に龍土軒と云ふ佛蘭西料理屋がある。そこが龍土會の會場であつた。

義雄はそこに一番近いので、午後六時にはかッきり行つた。が、まだ誰れも来てゐない。

ボーイを相手に玉を笑いてゐるうちに、人がぼつり／＼集まつて來た。そのうちの一人が玉場へ飛び込んで來て、

「どうだ、久し振りで負かさうか？」かう云つて直ぐキユウを取つた。例の歌詠みから株屋の番頭に轉じた男だ。「然し、ねえ」と、かの永夢軒に於ける義雄の失敗を持ち出して來て、

「また電球をぶち毀すのは眞ツ平だぜ。」

「あれはこの玉屋へ行つてもおほ評判ですぜ」と、そばにゐたその主人が少しおほ袈裟に笑つた。

「もう、大丈夫だよ。」まじめ腐つて答へながら、義雄も臺に向つたが、いろんなことが氣にかかつて、もろく勝負に負け

た。「よせ／＼」と呼びに來たものもあつて、義雄も二階にあがつた。

渠を見るのは近頃珍らしいので、皆が話をしかけた。

「君の著書をありがたう」と挨拶するものもある。

「あんな短い紹介だが、取り敢ず新刊紹介欄に載せて置いたよ」と云ふものもある。

「耽溺はどうなるのだらう」と、こちらが現代小説にやつた作のことを云ふものもある。

「君の女はどうした」と、ぶしつけに聴くものもある。

「顔の色が悪いが、過ぎるのだらう」と穿うつたつもりでからかふものもある。

「また痔が悪くツて、ね、閉口してゐるのだ。」

「ぢやア、酒はやれまい」と、慰め顔に質問するものもある。が、渠はかた一方の耳がまだよくないので、左の方から云はれた言葉を度々聞き返したり、聞き落したりした。

やがて椅子が定まつて、日本酒の徳利がまはつた。

秋夢は幹事だから末席にゐる。渠は鋭い皮肉な短篇小説で名を出した人だが、外に「破戒」を書いた藤庵がゐる。「生」を書いた花村がゐる。劇場のマネジャーを以つて任ずる内山がゐる。また外國新作物の愛讀者で、司法省の參事官をしてゐる西がゐる。その西が紹介した農商務省の山本といふ法學士がゐる。株屋の番頭がゐる。工學士の中里がゐる。麴町の詩人がゐる。琴の師匠の笛村がゐる。漫畫で知られる様になつた杉田がゐる。或出版店の顧問、雑誌の編者等もゐる。

かう云ふ人々の中にあつて、いつも渠等の談話を賑はすのは田邊獨歩であつたが、今年の六月に肺病で死んでしまつた。餘り出席はしなかつたが、矢張り、會員であつた眉山は、獨歩の死ぬ少し前に自殺した。

眉山の自殺してから間もなく、茅ヶ崎海岸の獨歩の病室で、「この龍土會の會員の中で、誰れが眉山の次ぎに死ぬだらう」と云ふ話が出た。

「無論、田村の狂死、さ」と、毒舌家の病人は笑つて、「あいつが生きてゐるうちに、おれは死にたくない。」

さう言はれるほど、義雄も随分毒舌の方であるし、それをあとで聞いた渠は曾て獨歩の思想をまだ舊式だと批評したことがあるのを思ひ出したりしたが、今夜は甚だ勢ひがない。酒は平氣で人並みに飲んでゐたが、持病のむづやく且痛むのを頻り

にこらへてゐた。

花村は「鳥の腹」と云ふのを文藝俱樂部に出した男を捕へて、あの小説は描寫でない、下手な説明だ、きはどいところがあるのは構はないが、説明的だから、それを人に強ひるやうになつてゐる、挑發的だと云つて、發賣禁止になつたのも止むを得まい、などといちめてゐた。

藤庵は、或新聞記者に向つて、謙遜らしく、人生の形式的方面をどう處分してゐればいいのだらうと云ふやうなことを質問してゐた。

西は内山や中里と共に頻りにイブセンやメタリシクやストリンドベルヒの脚本を批評し合つてゐた。

かう云ふ別々な話がいつまでも別々になつてゐないで、互ひに相まじはり、長い食卓のあちらからも、こちらからも、機が梭が行きかふ様になつた時、義雄はその意味を取り違へたり、ただやかましい躁音が聴えたりする瞬間もあつた。それが如何にも殘念で、この耳だけに關して云つても、もう、これ等の人と自由に話し合ふ資格がなくなつたのかとまで思つた。

「田村が乙に澄ましてゐるやアがるので、今夜は少し賑やかでない、なア」と、株屋の番頭の云ふのが聴えた。「色をんなを持つと、ああおとなしくなるものか、なア？」

「けふは、何と云はれても、しゃべる氣になれないのだ。」かう云つて、義雄は笑つたが、自分のいつも特別に注意を引くからから笑ひも、それと好一對になつてゐる麴町の詩人の羅漢笑ひと云はれるのに壓倒された。

そして、花村の耳も鼻も目も内臓も、どこもかも健全で、而

も嚴やかな體格が何よりも羨ましくなつたと同時に、獨歩の死んだ時、茅ヶ崎へ集まつた席で、義雄は自分が花村に向つて、君は僕等すべての死んだあとと始末をして、誰れよりもあとで死ぬ人だと云つたことを思ひ出した。

次の忘年會大會の幹事を義雄も引き受けた龍土會の歸りには、おも立つた人々よりも一時代あとの若手連が二三名、麴町の詩人と共に付いて來た、が、中の町の隠れ家へは連れ込むことをしたくなかつた。と云ふのは、自分の痔が果して酒の爲めに非常に不氣分になつた上に、お鳥がうん／＼呻つて寢てゐるのを思つたからで、而もそれがたつた三疊のきたない部屋だもの——自分等の辨當を運ぶ辨當屋のある角で、渠等と無理に右と左にわかれた。

例のどぶを渡つて、戸を明けると、今夜は斷つてあつたので締りはしてなかつたが、酔つてゐるのと早く横になりたいとの爲めの荒ちからで、自分の引き明けた戸はがらりと大きな音を立てた。

「お歸りですか」と、下のかみさんが、炬燵をしてある奥の方から聲をかけた。

「あ、只今」と答へて、渠は自分で戸締りをしてから、あがり段をあがつた。

あたまの上には、無學、無趣味、無作法、卑俗で、話と云へば、賤業婦の噂ばかりの憲兵連があるのを思ひ出した。

上にも下にも、こんな毛だ物同様の野蠻人種が籠つてゐるほら穴より外に、義雄は自分の眠るところもない今の狀態を考へ

て見た。

「吾人の頭腦は銀河に浴し、吾人の兩足は地獄のゆかを踏む」と云ふエマソンの警句が浮んだ。が、若しこのおほ袈裟な口調で自分の考へを發表すれば、地獄のゆかを踏み破つて、而も天上に須佐之男の暴威の雄たけびをやつて見たいほど絶望的だ。

「こんな腐つたからだ！ こんな死獸のたいを借りたやうなからだ！ こんな多くの惡病氣の間屋をしてゐるやうなからだ！ ひよつとすると、耳や鼻や痔は何物かの梅毒から來てゐはしないかと疑はれるからだ！ ええッ！ こんなからだはどうでもなれ」と、義雄は二階へあがつてから、自分で自分を投げ出した。

「どうしたの」と、お鳥はその重たさうな首を枕からもたげた。「お酒が悪かつたのだろ——だから、あんなに行くなと云うたのに。」

渠は黙つて返事もしなかつたが、ほッこりと追つて來る女のにほひを嗅いだ。渠には、鼻も亦右の方しか役に立つてゐないのだが、一方で僅かに嗅ぎ分けるこのにほひが、今のところ、たつた一つの慰めだ。この頃は、外のどぶの惡臭も氣にならなくなつた。この部屋へあがつて來るまで陰氣臭いことも、さう神經を惱ませなくなつた。その代り、お鳥のこの臭ひがどう嗅ぎ直して見ても、義雄には穢多臭くなつた。そのくせ、別にわき香か何かのやうにいやな感じを伴つてゐるのではないが——。

それでも、なほ、千代子の瘦せて冷めたさうなところよりも、夜は、梅が香を包んでゐるやうに、此あつたかい臭ひのすると

ころがいいのである。渠はこの臭ひがしないと、却つて寂しい、寂しい氣持ちになつた。

お鳥がまた別にかぜの醫者を呼んでゐるのに、義雄がまた耳に通ふほかに他の醫院を訪ふのは、自分で我慢してゐた。そして、隔日に行く學校へは缺勤屈を出した。が、堪へ切れなくなつて、或る肛門病院へ行つた。そして注射をして貰つたのが、藥の利き目でか、一層不氣分を増した。

「あたいにこんな二重の苦しみをさせるから、その罰で自分もうへした二重の病氣になつたのだ。」

「そりやア、さうかも知れない——許して呉れ」と云つて、義雄はそれをお鳥の氣休めに供し、その實、自分が苦しいのにかゝ女の看護までをしてやらなければならぬ面倒を少しでも避けるやうにした。

二

「おかアさん！　おかアさん！」

義雄はぎよツとしてあたまを持ちあげた。お鳥が死んだ母親を呼んでゐるのである。

病人を見ると、あふ向いて、目をつぶつたまま、久し振りの優しい微笑を浮べてゐる。

炬燵の火も消えた眞夜中、しんとして、鼠一匹騒がない。消し忘れた置きランプの光に、時計のちくたばかりが明らかに響く。

その時計のこまかい確かな刻み——それが渠の痛みを全身に傳へる血脈にめぐつて、刻一刻快樂と思へた夢が、羽ばたきを

して過ぎ行くのがあり／＼と見える。

ふと、その過ぎ行く快樂の夢を米國の浪漫的詩人アランポーが歌つた「おほがらす」の姿にして見た。レノアと云ふ世に亡き乙女を戀して、

「あはれ、冴やかに　吾れは　覺ゆ　寒き　師走の　夜中
なり、

炭の　燃えさし　離れ離れ　床に　その影　落してき。

吾は　頻りに　朝を　待ちつ　無駄に　求めて　わが書
より

借らん　と　せしは　憂さの　晴らし

であつたところへ、「何を瘦せ魂、鄙び魂の不吉徳鳥　古鳥」の鳥類の惡魔が分らないやうな眞ツ黒なおほ鴉が闇の外から飛んで来て、書齋に備へつけられたガラス彫像の肩にとまつた。そして愛婦の今と同様フーモア、「またもなし」と語つた。

それは失戀と云ふ物を地上に引き据ゑて見たのだが、英國の畫家詩人ロセチの「昇天聖女」に、

「昇天　聖女　の　身を　傾けて
怨りしは　黄金の　天津橫木。

まなこは、深みて、一しほ、海の
平らに　靜める　それに　勝り。

その手に　持ちしは、小百合を　三個、
髪なる　きら星　數は　七つ。」

とあるのも、つまり、これは失戀を天上に祭りあげたに過ぎない。

ワルツホイトマンにも同じ系統の「揺り籠から」があり、義

雄自身にも長い詩篇「三界獨白」中の「常盤の泉」があつて、矢ッ張り、若々しい戀の失敗を地上なり、天上なりに引き据ゑ、祭りあげてゐたのが思ひ出された。

然し現在の狀態はどうだ？

空想の中でも、天女や戀人なら、まだしも——架空のでも、おは鴉やアラバマから來たと云ふ鳥ならまだしも——義雄は身づから穢多だと思ふものを介抱してゐるのである。

無論、世に神聖な戀愛などはない——あつても、ただの空想で、現世に活動する人間の糧にはならない。が、曾ては聖愛などを——その時から、肉的に見てたが——歌つたことがある渠は、今更らのやうに今昔の感無しにはゐられなくなつた。

穢多の熱病人に、殆んどあらゆる病氣の間屋！ 渠は、かう思つて、ます／＼絶望的な蠻勇氣を出した。

「死にたくはない——今、一度、この女を完全なからだに返して、その全身の愛を本統に自分に捧げさせて見ないぢやア置かないぞ。それからなら、自分が死んでもいい、また、破れ草履を棄てるやうに、この女をすつぱりおツぱり出してでもいい。」

かう考へて、渠は片手で自分の痛みの箇所を押しこらへながら、熱に疲れてよく眠つてゐるかの女の二つの病氣の、直つた上の樂みを想像した。

しんとした、そこには何物かが窺つてゐるやうだ。渠はこッそり罪惡でも犯してゐるやうにまたぎよツとした。

「おかアさん！」と、輪郭のぼやけた一聲に、この僅か三ヶ月間に瘦せの見えて來た顔の微笑がまだ浮んでゐる。

また、夢を見てゐるのらしい——この飽くまでも見飽きぬ妖態！

試みに、そのあつたかい胸から、渠は自分の一方の腕をのせてゐたのをやはらかに外すと、かの女は逃げるものを追ふやうに、兩の手を空しくさし延べた。が、直ぐそれを引ッ込めたかと思ふと、やがて、

「あア、ア、ア——」頼りなげに又苦しさうにもがいたあげく、半身をがばりとともたげた。が、あたりをじろ／＼見渡して、「畜生！ 殺すぞ」と云ひながら、再び枕に就いた。

ひどい熱になんだあとの疲れて、眠りはまだこの恨みの深い人を纏つてゐると見えた。直ぐいびきをかき出した。そして、そのく／＼云ふ響きが、おもて座敷の憲兵どものとの何の遠慮もなく競争を始めた。

みじめな人生の裏家住ひ——かう云ふことが義雄のあたまに浮んだ。こちらのいびき家は、然し、相變らずうなされてゐると同時に、からだの筋肉が痙攣を引き起す前のやうにびく／＼動いてゐる。

「鳥ちゃん——鳥ちゃん！」

靜かに呼んで見たが覺めようもしない。あふ向けに吐く白い息と横向きに吐く白い息とが交叉した。渠は考へた、呼び起して、覺めた自分と同じやうに苦痛を感じさせるよりも、いッそのこと、死ぬまで斯うしてゐさせる方がまだしも功德かも知れない。且、自分に對しても、やき／＼面倒を訴へないでいいと。

若しこちらが昔の人のやうに十五六歳で結婚をしてゐたら、

これくらゐの總領娘があつたかも知れない。無病息災であつたきのふは、駄々も捏ねたし、泣いて無理も云つた。が、その可愛さは、もう、なくなつた。

過ぎ去つた快楽は現在の自分を満足させるに足りないのに、矢ッ張り、こんなところにこびり付いてゐるのは、宿無し犬が掃き溜めの汚物に飢ゑをつなぐと同様、ここに自分の苦痛の必然な餌じきを求めてゐるのだ。

かう思ふと、渠には女の方も亦さうではないかと云ふ考へが起つた。この頃、かの女は非常に愛着を増した。少しでも男を自分のそばから離れさせまいとする。が、それは男を先づそとに見えない心臓や肺のあたりからがつ／＼とかじつて、つひにはその全身をかの女の病熱と衰弱との喰ひ物にしてしまふのではなからうか？

自分の戀も純潔でなければ、お鳥のも亦利害を混濁してゐると思ふ。と見ながら、ラシブの光に獸性が目覺めて、二つの肉その物の腐爛して行く姿を心のまなこに見詰めてゐる。そしてこちらの手あしに女の存在を知らせるのは、こちらがかの女に相分つた毒血のあつたかみである。

このまま死んで、腐つて、骨になつたら——？ さうだ、その時は、

「二つのしやりかうべ！」恨みもない、執着もない、全く關係のないあかの他人だと渠は考へた——そして、また他人の寢ことは却つてはツきり聽えるものだと思ふ。と誰れかが云つたことを。

寢てゐる病人はまたうなされ出したが、今度は何かの怨靈が磐石の重りを以つて息の根を押し止めようとしてゐるのを、四

苦八苦のものがきで逃げようとするやうなありさまがあり／＼と見えた。兩うでを空に開いて、

「あア—— あアア、ア、ア——」と叫んだ時は、怨敵の姿も見えたかのやうに、義雄は三たびぎよツとした。かの女は目をきよろりと明けてこちらの驚いた顔を見た。

「何か云うた？」ほんやりとほほ笑みで。

「うなされてゐたよ。」

「さう——夢を見て、苦しかつた。」

「——」義雄はただかの女の顔を冷やかにのぞき込んで、寒い深夜のどこかそとを想像して見た。千代子が神社か大木の蔭で薬人形の釘を打つてゐたのではないか知らんと。

三

「熱の方は大分えいやうになつた。依つて、あすからでも、また牛込の病院へゆこか？」

「無理にしても悪いが、なア——おれも然し痔の方は少し辛抱出来るやうになつたから、また耳の治療にせツせとかよはうかと思つてゐるのだ。」

「こんな二人までも苦しい目に會ふのはをかしい——あたいの寫眞が一つ我善坊に置いてあるから、自分の寫眞と一つにして、あいつがそれを五寸釘でも打つてやせんだろか？」

「まさか、ねえ」と、こちらは何げなく見せて、「よしんば、そんなことをしたところで、お前とあいつとの間に無線電信でもかかつてゐなけりやア、通じる筈がない、さ。」

「でも、さうして人を呪ひ殺した奴が田邊に一人あつた。」

「そりやア、自分を呪つてると云ふことを傳へぎきでもしたから、神經に負けて、われとわが身を殺したの、さ。」

「でも、自分はあいつに靈感が出て來たと云うたぢやないか？」
「それはちよつとさう思つただけで——きつとそれだとは思つてゐない。」

「でも、若し感^{かん}ついて、ここへやつて來たらどうする？」

「今まで來なけりやア、もう、大丈夫分りッこはないの、さ。」
かう云ふ話があつた時は、義雄とお鳥とが大工の家を體よく斷られて、假りにその隣りの辯護士のおやぢとその妾とがその間に出來た一人の子と共にゐる家の二階へ移つてゐた。同じ間取りの、同じ裏二階の三疊敷だ。

その細君が矢ッ張り女房のある人と一緒になつてゐると云ふ事實は、同じやうな事情にあるお鳥をして少しその神經を休めさせた。

「隣りの人が云うてたが、もとはあのおやぢさんの息子の家で下女をしてつて、おやぢさんの子を孕んだのださうや——見ッともない女だらうが？」

「見ッともないとしても、からだは無病息災だ。」斯う義雄が答へたのには自分の持ち物の方には面倒くさい病氣がとッ付いてゐると云ふ不平も含めた。

「自分が悪いのぢやないか？」とお鳥はこちらを睨み付けた。

そこのおやぢと云ふのは、自分の息子が辯護士の若手として羽振りがいいのを自慢した後、義雄と同國だと分つた嬉しさに、「わたしも、同じやうな事情で、息子と同居してをる婆アさんがやかましいのに困つてをりますので、あなたのことも豫て人

ごとには思つてをりませんでした」と云つた。

「なアに、あり勝ちのことですから」と、こちらは笑つて軽く受けたが、こんな死にぞくなひのおやぢなんかの同情は少しもありがたくなふと思つた。

義雄の耳は一向にはかゝしくもないのもまどろッこしくて溜らないのだが、痔の方がよくなつて來たので、學校の冬期試験をやりに行くし、段々氣力も恢復した。

すると、自分の身に纏ひ付いたすべての面倒を早く振り切つて、早く樟太の事業に對する計畫に直進したくなつた。

自分の耳も面倒だ。いとこの重吉が北の方からこちらの電報に對してまだ便りのないのも面倒だ。病人のお鳥も面倒だ。然し最も面倒なのは、夫婦に關する法律の規定と父の遺言とを楯に取り、我善坊の家にがん張つてゐるヒステリ女である。

「人を呪へば穴二つだ——早くあの子代子がくたばつて來れりやア」と云ふ願ひが、義雄の胸を絶えず往來してゐた。ところが、意外にも、死んで呉れたのは千代子でなく、かの女が里にやつてあつたのを取返しした赤ん坊だ。

龍土會の忘年會が、義雄と長谷天香といふ批評家との幹事で、午後五時から鳥森の湖月であるといふ日の晝過ぎであつた。渠が本郷の耳科醫院へ行つた歸りに、中の町の中通りを耳ばかり氣にして通り過ぎてしまひ、裏通りの隅にある例の辨當屋と反對になつたかどから出ると、今その辨當屋から出た千代子の姿が目に入つた。

目は落ち込んで、頬はずつとこけて、顔全體に血の色としては

少しも見えず、五六間を隔てて見たところでは、全く憂ひと呪ひのおも影であつた。

たつた僅かのあひだ見ないうちに、身體までが實際にあんなに影の薄い怨靈になつてしまつたのかと思はれた。

羽織りや着物は不斷着のままで、こちらには氣が付かず、下向き勝ちに歩いて、そのかどをお鳥のゐる方へ曲つた。

「たうとう嗅ぎ付きやアがつた」と思ひながら、直ぐ義雄はインパネスの袖で頬をこするふりをして、向うの横町へ逃げ込んだ。

義雄は千代子を避けたのを誰れにも知られなかつた。その足で辻くるまに乗り、龍土軒の玉突場へ行つた。

が、氣になつて、玉が當らないので、二階へ移つて洋食を二皿ばかりやりながら、曾てここへお鳥を連れて來たことを思ひ出した。

「洋食などいやぢや。」かう云つて、お鳥がわざとらしく兩手を袖の中へしまつてゐるのを見てこちらは喰ひ方を知らないのだと推察した。そして、そばに來てゐたおかみさんの手前もあることだから、こんな田舎者をいい氣に可愛がつてゐると思はれないやうに、

「まア、いやでも喰べさせてやるぞ」と、向うの皿の肉を自分のナイフで切つてやりながら、「こいつは好き嫌ひが多くツて困るのですよ」と云つた。

何ほくどくしい千代子でも、もう、歸つてしまつたらうと思はれる頃、義雄はそこを出て、中の町へ向つた。然しまだ闇に野犬のしッぽを踏みはしないかと云ふやうな氣持ちで、お

そるおそる假寓のどぶをまたいだ。

すると、直ぐ下の女が出て來て、鬼の首を取つた手がらばなしをでもして聴かせるやうな待ち受けた様子で、

「今しがた、奥さんが見えましたよ。」

「さうですか」と、わざと平氣ではしご段をあがらうとした。

「何だか、お子さんがザフテリヤで危篤だから——」

「えッ！」渠ははしごの第一段にかた足をかけたまま踏みとまつた。

下の女は言葉續けて、

「芝の慈惠病院の隣りの東京病院へ直ぐ來て下さいとおツしやつて、お歸りになりました。」

「さうですか、ありがたう」と答へて、渠はお鳥の藥臭い寢どこへ行つた。

「來たよ」と、かの女は半身を枕からもたげて、こちらを恨めしさうに見た。

「何が？」

「あいつが、さ。」

「さうか？」枕もとに坐つて、そ知らぬ風はして見たが、心のうちはかき亂されてゐた。第一、どうしてここを嗅ぎ付けただらう？ 靈感などと云つても當てになつたものぢやアない。さきに、森のある近所などとはけたのも、誰れかに聽いて知つてゐたのかも知れない。或は、また、先月の龍土會の歸りに廻

町の詩人がそばまで來たから、あの男から大體の見當を聽いて來たのだらう。また、あんなに影が薄かつたのは病兒の看護に

疲れたのに相違ない。それにしても、自分自身で出て來たのを見ると、子供はたとひ危篤だとしても、こちらが全く可愛がつてもゐないので、向うも焼けを起して來たのだらう。

かう考へると、千代子の身の周圍を可なり興味つよく鑑み付いてゐたこちらの不思議な幻影や、可なりおそろしく想像してゐた呪ひの魔力や、罵倒しながらもかの女の子煩惱を取り柄として子供のことは委せ切りにしてあつた安心、などは全く消えてしまつた。が、きつと、かの女とお鳥とはまた云ひ合つてゐたのだと思つたので——それでわざと三時間ほどよそへまはつてゐたのだが——その面倒くさい報告を聴かせられるのがいやであつた。

「また喧嘩したのだらう？」

「喧嘩などしやせん。」

「ぢやア、あがらなかつたのか？」

「さう、さ。」

「……」それぢやア、まだしもよかつたと、義雄は多少氣を落ち付けた。

「でも」と、かの女は言葉を續け、「隣り近所へ入らないことまでしやべつて行つた。見ツともなくて、もう、ここにもをられませんかやないか？」

「どんなことを云つたのだ？」

「どんなことツて——」お鳥がふくれツつらをして語つたのに據ると、千代子は先づ辨當屋に當りを付けて這入り込み、そこでこちらのゐどころを確かめ、そこを出てからお鳥のもとゐた大工に行き、またその隣の蒲團屋にまでも行つて、お鳥に關

することを洗ひざらひしやべり立てたのである。お鳥は、また、下の女から、それを聴かせられ、氣になつて溜らないので、寢床から飛び起きて、千代子のまはつたさを自分も一々まはり歩いて、自分の辯護をすると同時に、向うの惡口も吹き立てて來たさうだ。

「どいつも、こいつも仕やうのない女どもだ、なア。」

「でも、皆がをかしな人だ、目ばかりきよと／＼させて、聴きたくもないことをわざ／＼しやべりに來て、と云うてゐた。」

「お前も行つたのぢやアないか？」

「あたいのとはあとのことぢや——然し」と、お鳥は餘ほど讓歩してやると云ふ態度で、「子供が病氣なのは可哀さうだから、行つておやり。」

「そりやア、行くが、ね——」考へて見ると、第一子（女であつた）もヂフテリヤの苦しみ枕もとの小ランプを握まうとしながら死んだ。第三子（男であつた）も同じ病氣であつたが、母に抱かれながら、なせこんな苦しい目に會はせるのかと云ふやうな目附きを残して死んだ。第一子の時は初めての子でもあるし、二年二ヶ月も生きた記念があるので、残念に思つたが、第三子は自分からの子として二度目の死でもあるし、たつた九ヶ月をさう抱きもしなかつたから、惜しくはなかつた。今回の赤ん坊に至つては、見たことさへ稀れな上に、どうせまた死ぬのだらうと思ふと、全く愛着が起らない。

それでも、子が死んだら、またその死骸の處分はしなければならぬし、今夜は龍土會もあることだし、お鳥が成るべく早

く歸つて來て呉ねると頼むにも拘らず、

「今夜はどうか分らない」と云つて、義雄は二階を下りた。そして下でそれとなく聴いて見ると、千代子は大變な權幕で、意張つて上り込まうとしたのだが、お鳥の病氣で寢てゐると云ふのをかこ付けに、下の人が氣を利かせてあがらせなかつたので、

「わたしも、そんな病人なんか相手にしても詰りませんから、では、歸ります」と、千代子は飽くまでも負け惜しみを云つたさうだ。

それに、入院したのは赤ん坊一人と思つてゐたら、さうでなく生き残つてゐる四人の子供をたつた一人除いたあとのすべてがその病院の厄介になつてゐるのだと分つた。

車を驅けらした時は、もう、四時過ぎで、どこでもあかりをつけてゐた。

東京病院の受け附けに驅けつけて聴くと、赤ん坊は既に息を引取つたと告げられた。そして、次女の當美子は普通の病室に、三男の知春は隔離室に這入つてゐることが分つた。

義雄は、弟の聲に桐ヶ谷の火葬場へ行くつもりで、直ぐ支度をして來いと云ふ使ひを出してから、先づ知春の室に行つた。すると、千代子が一人附き添つてゐて、所天を責めるに最もいい口實を得たと云はぬばかりの權幕だ。かの女は自分の混亂した忿激と愁傷とをまふたの落ち窪んだ目に漲らせ、而も自分は亡兒の魂に従つて既に地獄か墓の底までも檢閲して來たやうなつよい暗い光を顔おうに現はして、

「あなたのおかげで、わたしも兒どもの死に目に逢へなかつた

ぢやアありませんか？」

「そりやア、知れ切つてらア、ね。」義雄はかの女に毒々しく見せたほどわる度胸をきめ込み、睨み付けながら、「おれの隣り近處へまでも、わざ／＼入らざらんおしやべりをしてゐやアがつたからだ。」

「おしやべりをしないで、どうします？ あんな女の場合は、一切合切しやべり立てて、隣り近處へ顔向けの出来ないままでにしてやるんだ。」その聲で、眠つてゐた兒が目を覺した。そして、父が一方の枕もとにゐるのを見て、びっくりしたやうに身をのり出し、他の一方にある母の膝にしがみ付いた。

「それもよからう、さ——また引ッ越させるだけのことだ。」
「どこへ逃げたツて」と、かの女は兒にそのまま蒲團をかけてやりながら、「このわたしの前ぢやア隠れおほせませんよ。」

「現在、けふ、あの辨當屋から貴さまが出たのをおれは見たのだ。面倒だからはづしてしまつたのだ。」

「さう——」千代子は意外だと云つたやうにぽかんとした。が、負けてゐないで、また語を繼ぎ、「然し、清水の居ところは當つたぢやアありませんか？」

「原田かどこかで云つてもらやア、當るのは當り前だ。」

「いいえ、そんなことア——あすこへは云つてなかつたぢやアありませんか？」

「ぢやア、麹町で聴いたのだらうよ。」

「あの方だツて、知りやアしません。」

「貴様（あなた）が口どめされてゐるの、さ。」

「あんなこと！ あなたは餘つぽど疑りッばいの、ねえ。」